

兼燃料係、燃料係兼駅手、燃料係の定員十五名である。

歴代駅長名を見ると、

初代	梶山泰三
二代	森田久次郎
三代	荒木力
四代	幸田沢五郎
五代	隈田泰二
六代	湯村正力
七代	嶋村午三
八代	小野塚茂太
九代	片山勝三
十代	成沢国太郎
十一代	小野庄三郎
十二代	佐藤膳一
十三代	斎藤慎一
十四代	山本政太郎
十五代	多田昌夫
十六代	荒木武
十七代	田中繁男
十八代	金森憲一
十九代	中島宗正

二十代 結城長蔵

二十一代 大内巖

二十二代 宮口清太郎

二十三代 池田清良

二十四代 秋山清秀

二十五代 辻上定一

二十六代 平河内義雄

次に乗車人員を見ると、昭和二十一年に六〇・三〇七人、同二十五年に六九・一三九人、同三十二年一一八・九六七人と増加している。

貨物の取扱数も発送の部で見ると、昭和二十一年に一七・六六トトン、二十五年に三一・三八二トトン、三十年に四四・一四五トトン、三十二年に四八・九四六トトンと増加している。

金山旅行会は昭和三十一年六月十六日の創立で、石川般太郎を会長とし、月々二百円を貯金して年一回又は二回団体旅行会を催し、金山駅々勢圏内の人々の親睦と見学に便している。

### 第七節 鹿越駅

明治三十三年十二月二日の開駅であつて、アイヌ語の

「ユク・ルペンペ」の意識で鹿の越える道という意味からきている。

明治三十年に十勝線として旭川を起点に工事され、明治三十三年鹿越駅まで開通したもので、明治三十五年に落合に開通するまで十勝線の終点であつたのである。それでこゝで汽車を降りて十勝に向つた入地者や団体も多かつたことは他にも書いた通りである。

また狩勝トンネルに向う鉄道工事の物資供給地でもあつた。明治三十年に開拓鉄道として着工されたので、北海道としても歴史の古いもので、鹿越開業の明治三十年にはまだ札幌は開通せず、空知太（滝川）と旭川が開通した翌年である。

明治三十八年八月一日に函館と小樽間が開通したとき初めて落合から函館にレールがつづいて、開拓の動脈になつたのである。

駅機構及び系統管轄の変化は次の通りである。

明治三十三年十二月 二日

旭川鹿越間全通開業、北海道庁北海道鉄道部の管轄であつた。

明治三十八年 四月 一日

北海道官設鉄道逓信省の管理となり、札幌鉄道

作業出張所々轄となる（逓信省管理が面白い）

明治四十年 四月 一日

帝国鉄道庁北海道管理局（札幌）旭川運輸事務所々管となる。

明治四十一年十二月五日

帝国鉄道院北海道管理局（札幌）

大正 八年 五月 一日

札幌鉄道管理局旭川運輸事務所々管より釧路運輸事務所々管となる。

大正 九年 五月十五日

鉄道院が鉄道省になる。

大正十二年 四月 一日

釧路運輸事務所々管より旭川運輸事務所々管となる。

昭和十七年 九月十一日

旭川運輸事務所が旭川管理部となる。

昭和二十三年十二月五日

日本国有鉄道公社となり、運輸省の監督下となる。

昭和二十四年十二月一日

旭川管理部所管より釧路管理部所管となる。

昭和二十五年 一月 十日

釧路管理部が釧路鉄道管理局と改正その所管となる。

歴代駅長名は次の通りである。

初代	佐藤文治
二代	別所 萁
三代	山本 政太郎
四代	小原 複
五代	新山 謙太郎
六代	渡辺 恭造
七代	鈴木 十郎
八代	清水 舜太郎
九代	蜂須賀 政義
十代	高橋 証三郎
十一代	森谷 健次郎
十二代	西野 広
十三代	関田 文雄
十四代	二瓶 儀三郎
十五代	和田 作蔵
十六代	及川 富
十七代	西畑 芳雄

十八代 岡部 慎

十九代 浅野 正三

二十代 島津 寛兄

二十一代 日向 武輝

二十二代 秋田 秀雄

九代駅長蜂須賀政義は、蜂須賀小六の孫で柔道の有段者であつた。

乗降人員は明治大正時代は不明であるが、昭和十五年が一七・八七五人、昭和二十一年が五五・一七五人、昭和三十二年が一・四八一人であつた。

発送貨物は明治、大正の記録はないが、昭和十五年石灰原石二三・二六二トン、昭和二十一年木材四・一八七トン、昭和三十二年木材三・八二五トンとなつている。

鹿越旅行会は昭和二十九年七月十八日の創立で、五十名の会員があり、毎年一回以上道内観光地を歴訪している。会長は杉山金市である。

### 第八節 東鹿越駅

昭和十六年十二月二十九日信号場として開設され、昭和二十一年三月一日、一般駅として開駅されたのであるが、鹿越駅から三・六キロ、幾寅駅から四・〇キロに位